

## 大通公園を望む窓辺から

### 長続きしないのは「遺伝」か？

常任理事 櫻井 晃洋

趣味でも仕事でも、この道一筋で長くひとつのことに打ち込む人と、いろいろなことを手広く手掛ける人がいるが、自分は間違いなく後者だと実感する。昔から何をやっても長続きしない。中学校の時は吹奏楽にのめりこんでいたが、高校で入ったのはバドミントン部、大学では一転ヨット部に入り、冬を除く週末は朝から夕方まで信濃川河口近くの日本海に浮かんでいた（時に沈んだ）。ヨットは卒業後も続けたかったが、海から遠い信州の松本で仕事をする事になり、これも気が付けば遠い存在になってしまった。野球やスキーを楽しむようになったのは大学を卒業してからのことになる。これらも最近は無沙汰している。

医師になり、大学中心の道を歩んできたが、最初の10年は甲状腺の基礎研究に没頭し、留学もしたのだが、帰国したら不思議に熱が冷めてしまい、その後の10年は腫瘍の研究に足を踏み入れ、それが一段落した次の10年は教育に無性に関心を持ち、志願して一年生の医学概論を担当したりしていた。縁あって札幌医大に着任してからは、当然のことながら仕事のほとんどは遺伝医学に関するものだが、定年後はまるで違うことをしている（または認知症で何もしていない）ような気がする。

やはり自分には「この道一筋」という言葉は縁遠いようだ。インターネットで子どもの才能を遺伝子で調べるといふ、科学的根拠がほとんどなく人権的にも問題をはらむインチキ商品があり、遺伝にかかわる者として事あるごと批判しているが、試しに自分のサンプルを送ったところ、報告書には「集中が続かないので学習には不利」というありがたいご託宣が書かれていた。根拠はなくても面白くないものだが、妻には「当たってる」と言われてますます不満が膨張した。やはりこんなインチキ商品は撲滅するしかない。

### 人口減少が進む小樽市の周産期医療と小児科医療

監事 津田 哲哉

小樽市は、人口減少の著しい高齢化が進む市として道内10万都市の中で一番であることは、以前より周知されていることです。

現在人口121,000人、65歳以上の高齢者率35%以上と高齢者の都市です。市の政策もこの10年間（この間3回の市長選）は、高齢者対策が主でした。子どもに関する具体的な将来構想はほとんどみられません。最近では、1年間2,000人の減少がみられ、若年層の流出も多くなっております。市の将来が明るく見えないのは、高齢者が多いのではなく、若年層が少ないことです。

私が当地で開業した昭和58年頃の分娩数は年間1,700人、現在は500～600人です。この小樽市の状況で大きな問題は、病院での周産期医療が崩壊したことです。現在小樽、北後志地区は1軒の産婦人科クリニックのみで年間400人程の分娩数です。さらに、小児科単科の開業医は70歳台の2人のみとなりました。昭和58年頃は8軒の小児科診療所がありました。この現状は小樽市だけでなく道内の地方都市にも、近い将来現れてくると思います。高齢者医療にのみ目を向けるのではなく、周産期、小児科医療の環境を改善し教育レベルを上げなければ若年層の定着は難しいでしょう。

小樽市の現在の周産期、小児医療の現状からみた地方都市の不安を書きました。

